第一席

出会いに感謝

大分県立大分舞鶴高等学校二年（大分県）
渡邉　みのり

まさか私が茶道部に入部するなんて、高校に入学する前の私は想像できたのだろうか。私の高校生活の計画の中に、もともと「茶道」は入ってなかった。しかし、今、私は茶道部の一員としてお稽古に励んでいる。それでは、なぜ茶道部に入ることを決めたのか。

高校に入学したら、何かしらの部活動に入ることは決めていた。小学一年から書道を続けていたこともあり、はじめは書道部に入ろうと思っていた。しかし、私は登下校で二時間かかるため、毎日の部活動は体力的にも精神的にも負担が大きいと思い、書道部を諦めることにした。何部に入ろうか考えていた時、ある一人の友人が「茶道部が新入生へのお茶会してるみたいだから行ってみようよ」と声をかけてくれた。この時私は、「茶道のことなど全く知らないのに、行って大丈夫なのだろうか」という気持ちよりも、「もしかして和菓子が食べられて、お茶も飲めるかも」という気持ちの方が大きく、友人に「うん、行こう！」と返した。この出来事が茶道との出会いだ。

実際、お茶会はとても楽しかった。お菓子とお茶目当てで参加したと言っても過言ではないが、それ以上に作法室の温かい雰囲気がとても心地よかった。学校なのに、畳の部屋があることにも驚いた。お茶会では、実際にお茶を点てる経験もできた。それまで自分で茶を点てたことなどなかったので、先輩のようにきれいな泡ができるはずもない。しかし、自分で点てたお茶は少し苦かったけれどおいしかった。話を聞くうちに、部活動は金曜日の週一回しかしていないことが分かり、ぜひ入りたい、いろいろ知りたいと思い入部した。

入部してからは、学ぶことがたくさんあった。多過ぎて覚えられるか心配だった。帛紗さばきが自分にとって難しく、習得するまでに時間がかかったが、全く知らない知識がどんどん出てきて、吸収している実感があり、お稽古が楽しかった。また、去年は文化祭でお点前を見てもらうだけのお茶会を開催することができた。私はそこで半東としてお客さんにお道具などの説明をすることを通じて、私自身、学ぶことがたくさんあった。茶道は私に、新しいことを知る、学ぶことはとても楽しいということを教えてくれた。

しかし、楽しいことばかりではない。私は今二年生で、

一年生の後輩がいる。一年生に帛紗さばきやお棗、お茶杓の清め方を教える時間があった。私たち二年生は、一年生に教える側として誤ったお作法はできない。自分が普段しているお作法が本当に正しいのかを見直すきっかけになった。そこで見つけた、間違っていたお作法を直すことが大変だった。今も立礼のお稽古をしているが、指先まで集中させて取り組むことの大変さを味わっている。

私は茶道と出会って、お稽古を始めてまだ一年と半年だ。知っていることも、ほんの少しにすぎない。高校の三年間で学べることの一つ一つを確実に身につけ、茶道を自分の特技と言えるようにしたい。そして、多くの方々に心を込めておもてなしできるよう、もっと上手く、美しいお点前ができるようになりたい。そのために、貴重なお稽古の時間を誰よりも本気で取り組んで、たくさんのことを吸収したいと思う。

茶道と出会って、世界が広がったのは間違いない。それを三年間で終わらせてしまうのはもったいないことだ。出会いに感謝し、続けられる時まで続けていきたいと思う。